蜘蛛の糸　《本当の話》

峰春秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蜘蛛の糸　《本当の話》

【Ｎコード】
Ｎ６６５３Ｏ

【作者名】
峰春秋人

【あらすじ】
芥川龍之介が描いた蜘蛛の糸。
それを私流に書き換えたものです。
蜘蛛を殺さなかったカンダタにも愛せる人はいたのではないでしょうか？

（前書き）

ずいぶんと長くなった

カンダタは蜘蛛の糸をつかんでそれを上ってきた奴らを蹴飛ばしたり、殴ったりしたからもう一度地獄に落ちたといわれています。けど、実際は違いました。
カンダタは蜘蛛の糸をつかんだときに空を仰ぎました。光輝いて眩しい光の中でカンダタがこの世で最初で最後の愛した人が手を伸ばしていたのでした。彼はその手を握ろうとして自分の手を見て気がつきました。
自分の手が人の血で汚れていることに。だから、カンダタはその手を握ろうとしなかった。
愛する人に握らせたくなかった。自分のあまりにも薄汚れた手を・・・。
これが本当の蜘蛛の糸の結末でした。
人を殺すことを快楽としていたカンダタが愛した者はただの女の子でした。
それではお話しましょう蜘蛛の糸《本当の話》。

カンダタは眩しいくらいの明かりがついた中華街の路地を駆け抜けていた。

「カンダタがいたぞ！」
「そっちだ！！」

見回りの声がカンダタの耳に響いてそのたびに嬉しそうな顔で家々の屋根を飛び回った。

町の明かりがまるでスポットライトのように当てられる。
そのたんびに町の人々が怖がったような顔して逃げて行った。
店のシャッターは閉まり、家々の窓は完ぺきに閉められる。
事件の主人公は満足そうに笑ってみせるとポケットから二つの玉を取り出す。
先端からはいつ付けたのか赤い火があった。
それを見た途端に見回りは急ブレーキをかけてその場に止まって顔を守るように手で覆う。

「あばよ！」

決め台詞を吐くとカンダタは二つの玉を投げてまた屋根をかけて行った。
扉は閉められ窓も閉められた無音の町の中でひときわ目立つ灰色の煙。
煙に含まれるのはいいにおいだった。
カンダタの鼻をつくとカンダタを誘い込んだ。
ゆっくりと近づいて開いた扉へと近づくカンダタ。
近づくにつれて煙に含まれていた臭いが増していきお腹が勢いでなってしまいそうになった。
息を殺してゆっくりと中へと入っていく。
長い廊下をまっすぐ行くと右へと突き当たった。そこもまたまっすぐに行く途中に明りがこぼれていた。
カンダタはゆっくりと顔をのぞかせるとそこには小さな影があった。
カンダタの胸辺りにしか満たない身長の少女が世話なしく動いていた。
鍋をかきまぜたり、フライパンで者を炒めたり、野菜を切ったりと・・・。
その横では顔の汚い女どもが汚い笑い声をあげながら喋っていた。

「それでーねー。」
「そうだ。ここいらで人殺しがでてるのしってる？」
「ああ。カンダタのことだろ？」
「そうそう。おっかないわよねぇー。」
「でも、イケメンって話よ。」
「知ってる！指名手配の写真もかっこいいもんね。」
「そりゃ・・・どーも。」

女たちの背中を冷汗が駆け抜けて行った。
ゆっくりと首だけを向けてみると長い長い日本刀を逆手に持って上げたカンダタが立っていた。
その目は血の色を連想させるほどの赤で身の毛もよだつ。
中央にいた女が声を上げようとした瞬間銀色の刃が女の前で踊った。
斜めから首に線を描かれた女の首は徐々に体からずれて行きついには床にコロンと転がった。
噴き出す血と女の転がった首を見て沈黙が走った。
そして、

「きゃぁぁぁぁぁぁ！！」

一人の叫び声で周りの時間が一気に動き始めて女どもは逃げ惑った。
そんな女達を追いかけてカンダタは楽しそうに日本刀を躍らせた。
宙に舞うのは人間の首と血だけ。
厨房が踊り場に。踊り場が殺し場に。
女たちの叫び声が一切聞こえなくなったのを確認すると鍋やフライパンがあったほうへと移動した。
煮えたぎる食材にフライパンの上で踊る油。
カンダタは手を伸ばしてその食材を口にしようとした。
が、カンダタは自分の首に包丁が突き付けらたことに気がつく。

「誰だ？」
「・・・。」
「・・・。」

女の声だと思ってちらりと包丁を突き出した奴の顔を横眼で見る。
ポニーテールにされた真っ蒼な髪の毛に真っ黒い瞳の少女。
先ほどまで世話なしく動いていた少女だとわかってカンダタはため息をつく。

「カンダタ？」
「だからどうした？俺を殺してみるか？それとも突き出してみるか？」
「・・・。」
「怖気づいたか？」
「いいえ。お腹が減ってるのであればどうぞ。」

そういうと少女はゆっくりと包丁を下した。
カンダタはそれをいいことに日本刀を少女に突き付けた。

「俺がお前を殺さないとでも？」
「・・・いいえ。殺すかもって思ってますよ。けど、抵抗したところであなたに勝てません。」
「ほう。理解が早い奴だな。」
「ご飯。食べなくていいんですか？」
「・・・食べる。」
「そうですか。」

少女は何事もなかったように奥から食器を持ってきて煮詰めていたスープを皿へとよそった。
そして、殺された女どもが散らばる机へとむかってスープを運んだ。

下に転がる死体を見ても動揺などせずに机にそれを置くと死体を片づけ始めた。
カンダタは何が起きてるのか少し飲みこめないで固まっていた。

「早く食べないと冷えますよ。」

遠くから少女の声が響いてカンダタは机の横に置かれていた椅子にドカッ腰を下ろした。
木製のスプーンを熱いスープの中へと入れてスープをすくう。
口へと運ぶと煙突から出ていた煙を吸った時と同じ臭いが口いっぱいに広がって次の瞬間にはスプーンが止まらなくなっていた。

「それほどがっつかなくてもたくさんありますよ。」
「お前は・・・俺が怖くないのか？」
「なぜ？人殺しだからですか？」
「そうだ。」
「んー。特にって感じです。」
「変なやつ。」
「そうですね。よく言われます。」
「このスープはお前が作ったのか？」
「はい。」
「・・・うまいな。」
「ありがとうございます。」
「・・・。」
「カンダタはどうして人を殺すの？」
「はぁ？」

あまりにも唐突に聞かれた質問は少女の口から聞けるものではなくカンダタは耳を疑った。
少女の顔を見ると少女は首をかしげるばかりだった。

「どうしてって言われてもな・・・。」
「理由がないの？」
「・・・。」

考えたことがなかった。どうして自分が人を殺しているのかなんて。

「カンダタは理由もなしに人を殺すんだ。」
「・・・ああ。」

ちょっと返事がしにくくて固まった。
けど少女は口元をゆがませて天を仰いだ。

「それってすごーくカッコイイですよね。」
「はぁ？」
「理由もなしに殺すってカッコイイじゃないですか。」
「・・・。」

真面目に彼女が何を言っているのかわからなくてカンダタは固まった。
少女は笑ってからカンダタの目の前にあった鞠を手にとってにこやかに笑って見せた。
何も言わずににっこりと笑う少女の手にもたれたものがどうしてもカンダタには鞠ではなくて生首に見えた。。
が、カンダタは高らかに笑って腹を抱えた。

「ハハハハハ！気に入ったぜ。お前・・・名前は？」
「千愛（ちあ）。」
「千愛？」
「うん。千人に愛されますようにって欲にまみれた名前。」

「いい名前だと思うぜ。」
「ありがとう。」

カンダタはあまりにも自分に似たような雰囲気を持つ彼女を気にいった。
見せることもなかったと思っていた笑顔を見せて千愛をみた。
その時、

「おい！誰かいないか？」

男の声が廊下から聞こえた。
そのあとに足音がぞろぞろと聞こえてきた。
千愛は急いでカンダタの手を引いてさっき殺した女たちの死体のほうへと連れて行った。
死体の転がるその横には一つの扉があった。

「入ったら右に曲がってずっとまっすぐ歩いて行って。そうするとこの町の川に出るから。気おつけて。」
「助けるのか？」
「うん。またご飯食べに来てね。」

にっこり笑う千愛の手が離れてドアが閉められて。
カンダタはしばらくドアの前でじっとしていたが奥から千愛と警察の声を聞いて急いで逃げて行った。

「本当にここに来ていないのかい？」
「来てませんよ。」
「・・・そういや。ここにお前は一人だけなのかい？」
「・・・じ・・・実は。」

「ん？」
「姉さん達がさっき自分たちで自殺をしたんです！」
「なに！？」
千愛は涙をぼろぼろと流しておお泣きした。
警察はそれ以上聞こうとせずに死体を運んで去ってしまった。
そして、千愛はころっと表情を変えて火をつけていた鍋に手をかけてぐるぐるとかき混ぜ始めた。
まるで今までの出来事はなかったかのように・・・。
「今度はカンダタに炒飯（チャーハン）でも作ってあげよう。」
そんなことを計画しながら千愛はかき混ぜる手を早ませた。

それから数日たってからカンダタはまた千愛のもとに顔を現し始めた。
ご飯を食べては仕事終わりの千愛と話をしていた。

「千愛は親がいないのか？」
「うん。気が付いたらもういなかったよ。」
「さみしくないのか？」
「別に。」
「強いんだな。」
「でしょ。」
無邪気に笑う千愛をみてカンダタは今まで見せたことのないほどの笑顔を顔に貼り付けた。
「カンダタ。私ね夢があるんだ。」

「夢？」
「うん。旅に出てみたいんだ。」
「なんで？」
「世界を見てみたいだけだよ。」
「・・・俺が連れて行ってやるよ。」
「え？」
「お前をココから連れ去ってでもな。」
「・・・期待してるよ。」

笑いながら千愛は小指をつきたてた。
カンダタもその指に小指を絡めて二人で誓った。

【二人で・・・世界を見よう】と。

「いたぞぉ！！カンダタだ！！」
「っぐ・・・。ヤバいな・・・。」

星空が輝いて美しい夜の日にカンダタはお腹から血を流して屋根を駆け回っていた。

「ったく・・・あの餓鬼め・・・。」

舌打ちをしながら数分前のことを思い出す。
一人の小さな少年が自分に向かって包丁を構えて刺したのだ。
痛くて、苦しくて・・・。

「千愛・・・。」

足取りはどんどん千愛のところへとむかっていく。
後ろから警備隊は追ってこなかった。
けど、怪我は重傷。これ以上は歩けなく裏路地で座り込む。

「ハァハァ・・・・。千愛・・・助けて・・・・。」
「カンダタ!?」
「千愛?」

運命としか言えない状況で荷物を片手に持った千愛が現れた。
急いで駆け寄ると泣きそうな目でカンダタを抱きしめた。

「怪我してるんだね。今すぐ運ぶよ。」
「駄目だ。」
「え?」
「お前まで捕まるぞ。」
「平気だよ。私はカンダタと一緒に居るから。」
「千愛。逃げろ!」
「嫌だ。」

千愛はけして首を縦には振らなかった。
カンダタは呆れて横に視線をずらした。その時、星のような模様をちりばめた蜘蛛がカンダタの横にぶら下がっていた。

「おい、この蜘蛛野郎・・・死にてぇか?」
「殺しちゃ駄目。」
「なんで?」
「よーく蜘蛛を見てみなよ。」

そう言われてじっと見つめる。
複数の目に映るのは綺麗なそらの色。藍色にちりばめられた銀色っ

ぽい粒。

「・・・綺麗だな。」
「そうだね。」
「人間とは全く違う。殺すにはもったいないな。」

カンダタはそっと蜘蛛を手に取ると千愛の手に乗せた。
千愛もじっと蜘蛛を見つめて優しく手で包み込んだ。
その手を上からカンダタは包み込んだ。

「カンダタの手・・・冷たい。」
「ああ、そろそろ神に見放されたかな？」
「・・・そんなことないよ。蜘蛛一匹でも殺さなかったもん。神様も少しくらいカンダタを見直すよ。」
「そうか？」
「うん。きっとね。」
「そっか。」

二人は笑うとおでことおでこをコツンとぶつけた。
お互いの体温を確かめ合うかのように。
その時、

「見つけたぞ！カンダタ！！」
「人質がいるようです！」
「違う！私は人質じゃー。」

といいかけてカンダタの冷えきった手が口に当てられる。
同時に日本刀がゆっくりと首に当てられた。
（少し黙ってろ。いいな？）
小さな声でカンダタは言うと悪党のカンダタに戻った。

「ハハッハッハッハ！！人質を返して欲しけりゃ・・・そこをどきな。」
「っち・・・みんなどくんだ。」
警察は素直にその場を離れる。
十分に警戒しながらカンダタは開いた道を通ってゆっくりと逃げる。
千愛の首にはまだ日本刀が当てられている。
今すぐにでも離したい思いでいっぱいのカンダタは力を振り絞って全力疾走した。
とにかく、逃げる。
それだけが頭によぎる。

「カンダタ・・・。」

目をギュットつぶってカンダタの安否を願うことしかできない。
横を警察が通り過ぎても千愛はしばらく動けないでいた。

次の日。
千愛は国の知らせを聞いて胸を締め付けられた。

「カンダタの公開処刑。本日夕刻より開始。」

夕刻はもうすぐ千愛は足がちぎれんとばかりに全力疾走をした。
途中こけてもすぐに立ち上がって城へと向かった。

「カンダタァァァァ！！」

「・・・千愛。」

牢獄に手錠、足枷を嵌められてカンダタは呻いていた。
本日夕刻に殺されるなど百も承知。
けど、千愛のことで頭がいっぱいなカンダタは自分が殺されることにどれだけ彼女が悲しんでいるのか時になっていた。

「千愛・・・わるいな・・・。」
「おい、出ろ！お前の死もそろそろだな。」

処刑執行人の不敵な笑みにも負けない笑みを浮かべてカンダタは威張った。
何も言葉は言わなかったがいつまでもそのふてぶてしい笑顔は消すことはなかった。
階段を上り広場へと出ると十字架が建てられていた。
そこに自分が張り付けられる日が来るとは思いもせずカンダタは心の中で悔しがった。

「カンダタァ！！」
「この人殺しぃ！！」
「母ちゃんを返せぇぇぇ！！」

罵声が飛んで会場は煩くなる。
けど、その罵声の中カンダタはいまだにふてぶてしく笑い続けた。
心の中ではいまだに千愛を心配してるのだが・・・。

「皆の衆、静まれぇ。」

壇上に現れたのは一人の着飾った男ー王様だった。
そいつはカンダタを見下ろすと口元をニヤツかせた。

「カンダタ。貴様を処刑する日を楽しみにしていた。」
「そりゃ、どーも。」
「フッフフ。そこまで余裕とはな・・・さすがだ。」
「早く殺せよ。めんどくせぇ。」
「そうだな。射撃用意。」

警備軍団が銃を構えて攻撃体制に入る。
さすがにカンダタも眉を動かす。

「待って!!」
「ん?誰じゃ?貴様は??」
「私の名前は千愛です!カンダタを開放してください!」
「千愛!」

足から血を流し、ところどころを砂だらけにした千愛が王様に向かって大声で叫んだ。
王様は邪魔をされて心底イラついていた。

「けしからん!カンダタと言う悪党を殺すなとは・・・。」
「そんな悪党を作ったのはこの世界です!それにカンダタは私を殺しませんでした!」
「何!?」
「蜘蛛だって殺しはしなかった。なのに殺すのですか?」
「たかが蜘蛛と人間一人と何十人という人間では重さが違う。」
「人間の命なんかに重さはありません。人を殺さない時もあると考えればカンダタは一。」
「何故貴様はそいつに味方する?」

王様の問いに千愛はカンダタのそばに寄り添ってはっきりと大声で言って見せた。

「私がカンダタを愛しているからです。」

その事実に会場にいた野獣ま達が騒ぎ王様も騒ぐ。
周りが騒いでいてもお構いなしにカンダタは高らかに笑った。

「ハハハハハッハッハハッハ。」
「な、何がおかしい！？」
「千愛。お前はやっぱり凄い女だよ。」

カンダタと千愛の視線が合って二人して笑う。

「いいか？俺はコイツを千愛を愛してる！」
「っぐ・・・。」
「人を殺すのは大きな罪です。けど、それをやり直させてあげるのが人間なんじゃないのですか？人を愛すことがまだできるのです。ならばやり直すチャンスがあってもいいのではないのですか？」
「だ、黙れ！！！もうよい！撃て！！」

王様は怒り狂って狙撃命令を出す。
千愛はカンダタに抱きつきギュッと抱きしめる。
カンダタは手足も動かすことはできないが千愛をしっかりギュッと抱きしめた。

ーバンッ！　バンッバンッ！！

枯れた音が何発も聞こえるさなか二人は意識を引き取った。

愛した人の隣で静かに息を引き取った・・・。

（・・・ここは？）

カンダタの目覚めたのは空が真っ暗な世界だった。

（・・・どこ？）

千愛が目覚めたのは真っ蒼な空が広がる世界だった。

二人が目覚めたのは異なる世界だった。

「千愛！千愛！！」

カンダタは飛び起きて真っ暗な闇の中を走りまわった。
けど、居るはずもない。
しばらく走っていると足が重いのに気づいて下を見るとカンダタは生きた屍の上を歩いていた。

「うわぁ！！」

足をつかまれてどんどん下へと連れて行かれる。

カンダタの顔には恐怖の感情しかなく焦り始める。
叫ぶことしかできないのに・・・怖くて逃げたいにに・・・なぜか
なぜか―。

「千愛。」

「！」

どこからか呼ばれた気がして千愛は振り向いた。
どこまでも広がるヒガンバナの花畑。
真っ赤に染まったそこに一人ポツンと立っている千愛は居るはずの
ないカンダタを探す。

「カンダタ。」

風が吹いて言葉が持っていかれる。
どんなに叫んでも風が持って行ってしまう・・・。

「カンダタ！！」

喉がつかれて、足も疲れてついにはしゃがみこんでしまった。
泣きそうになって目をこする。
そして、その手をどけて歩こうとした瞬間。
目の前の景色が一瞬で変わっていた・・・。

「蓮の池？」

一面に蓮があって池には花が浮いていた。
一本の木の横で千愛はしゃがみこんでいる。

「・・・あ、蜘蛛。」

池の上で何故か浮かんでいる蜘蛛。その蜘蛛を見つけて千愛は口を覆う。

「あ、あの時の蜘蛛。」

忘れるはずもない。
カンダタが殺さなかった蜘蛛。
背中に星がちりばめられた蜘蛛だ。
手にすくうと助けとばかりに千愛は叫んだ。

「お願い！カンダタのところに連れて行って！！」
「・・・。」
「お願い。・・・会うだけでもいいから。」
「・・・。」

蜘蛛は千愛の手から降りると池の上に落ちた。
そして、孤を描くように一回りする。
すると・・・池が一瞬で血の池に変わった。

「な、何これ？」

血の池の下に広がるのは苦しそうな人ばかり。
千愛は見てしまう。
その中にいた・・・愛する人。

「カンダタ・・・。」
口を覆って何も言えない・・・。
蜘蛛は優しく千愛の肩に乗る。

「・・・助けて。」
「・・・。」
「助けてあげてよ・・・。」
「・・・。」
「貴方を助けたのよ。一回だけチャンスをあげて・・・。」
「・・・。」
「お願い。」

蜘蛛はもう一度池に降りると自分のお尻から白い銀色の糸を垂らし始めた。
カンダタにまっすぐに降りて行く糸をみて千愛は願った。
（カンダタを助けて。）

「千愛。助けてよ。」

ボロボロのカンダタは涙目になりながら血の池地獄を流れていた。
その時、

「カンダタ！」
「・・・千愛？」

自分の名前を呼ばれてカンダタはすぐに上を向いた。
そこにいたのは太陽の光を浴びて光り輝くカンダタが愛した千愛の

姿だった。
カンダタの目が大きく見開かれた。
「カンダタ。この糸をつかんで！」
たらされた細い糸を見つけてカンダタは必死でその糸にしがみついた。
必死に登って千愛のもとへと急いだ。
「カンダタ！下！」
下といわれてすぐ見るとカンダタ以外の罪深き者たちが糸を伝って登ってきていた。
カンダタは急いで登り始めた。
「カンダタ！早く手を伸ばして！」
手の届く範囲まで来て千愛の白く細い腕を伸びてきた。
その手につかまろうとカンダタは自分の手を伸ばした。
が・・・青ざめた顔でカンダタは手を止めた。
血で汚れた自分の手をみて・・・カンダタは息をのんだ。
「・・・カンダタ？」
千愛の言葉にカンダタは決意をしたようにまっすぐな目で千愛を見つめた。
「・・・千愛。幸せにな。」
「え？」

のばされたカンダタの手は下にいた者たちへと向かった。

「離れろぉ！！」

人を殴って、蹴って、糸からすべての人を落とした。
蜘蛛の糸は一瞬で切れた。
下に落ちる時カンダタは千愛を見上げた。

「カンダタ！！」
「・・・あー。」

カンダタは何かを言った。
けどそれがなんだったのかなんてもう記憶にはなかった。

「か、カンダタ！！」

蓮の池を叩いて千愛は涙を流した。
誰かが死んだからって涙を流したことなんてなかった。

「どうして？カンダタは手を伸ばさなかったの？」

涙が蓮の池で波紋を描く。
蜘蛛が千愛の方で慰めるように糸を垂らす。
白い腕に蜘蛛の白い糸が乗る。

「これをまた下に延ばしたら・・・カンダタは上ってきてくれるかな？」

蜘蛛はじっと止まってから肩から降りた。
何も言わずに蓮の池を去って行った。
千愛は糸をぎゅっと握ってまだ下に広がる血の池地獄を見つめた。

「カンダタ・・・私・・・待ってるから。」

そう言って蜘蛛の糸を池へと垂らした。
ほかの奴らが昇ってくることは絶対にない。
だってこの糸は・・・カンダタと千愛にしか見えない・・・赤い糸なのだから。

「千愛。」
「カンダタ。」
「一愛してるからね。」

（後書き）

幸せにならないのがこの話のいいところ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6653o/

蜘蛛の糸　《本当の話》

2010年11月2日19時49分発行